

平成9年度 三翠化学会総会開催のご案内

三翠化学会

(題字は川川先生)

第46号
平成9年3月30日 発行
三翠化学会
津市上浜町1515
三重大学農芸化学コース内
電話/津(059)232-1211
振替/名古屋9-59347
印刷/株式会社あるむ
TEL(052)332-0861大長谷川正

梅林正直教授の講演も 「三翠のみどりの夢」

三重県支部総会も併催

春たけなわの今日この頃、会員の皆様におかれましては、各方面にてますます活躍のこととお慶び申し上げます。

当日は恒例の大学祭の中での催し物で賑わっており、その中に我が農芸化学の学生の努力による「農芸化学展」も計画されております。ぜひご覧下さい。また当日は、ラグビー部の創部七十周年を記念する式典及び記念試合が開催されるとか、聞き及んでおります。この機会に来学されるOBの皆さん、三翠化学会にもぜひお出で頂き、クラスメートとの再会をなさして下さい。

本会報の記事にもあります通り、平成九年三月末日をもって、土壌学・植物栄養学研究室(旧土壌肥料学講座)の梅林正直教授が定年により御退官になられました。先生は、常日頃より三翠化学会にも多大のご尽力を賜り、役員一同大感謝申し上げます。この機会に一度先生のご講演を拝聴したいものと考え、先生にお願い致しましたところ、快くお引き受け下さいました。総会に引き続き、先生が何十回も行かれたタイでの出来事や、松と梅植樹の事など楽しいお話がつかえるとお聞きしております。

当日は恒例の大学祭の中での催し物で賑わっており、その中に我が農芸化学の学生の努力による「農芸化学展」も計画されております。ぜひご覧下さい。また当日は、ラグビー部の創部七十周年を記念する式典及び記念試合が開催されるとか、聞き及んでおります。この機会に来学されるOBの皆さん、三翠化学会にもぜひお出で頂き、クラスメートとの再会をなさして下さい。

本会報の記事にもあります通り、平成九年三月末日をもって、土壌学・植物栄養学研究室(旧土壌肥料学講座)の梅林正直教授が定年により御退官になられました。先生は、常日頃より三翠化学会にも多大のご尽力を賜り、役員一同大感謝申し上げます。この機会に一度先生のご講演を拝聴したいものと考え、先生にお願い致しましたところ、快くお引き受け下さいました。総会に引き続き、先生が何十回も行かれたタイでの出来事や、松と梅植樹の事など楽しいお話がつかえるとお聞きしております。

本会報の記事にもあります通り、平成九年三月末日をもって、土壌学・植物栄養学研究室(旧土壌肥料学講座)の梅林正直教授が定年により御退官になられました。先生は、常日頃より三翠化学会にも多大のご尽力を賜り、役員一同大感謝申し上げます。この機会に一度先生のご講演を拝聴したいものと考え、先生にお願い致しましたところ、快くお引き受け下さいました。総会に引き続き、先生が何十回も行かれたタイでの出来事や、松と梅植樹の事など楽しいお話がつかえるとお聞きしております。

梅林正直教授 定年ご退官



三重大 生物資源学部教授 梅林正直先生(土壌学・植物栄養学教育研究分野、旧農芸化学科土壌肥料学講座)は、平成九年三月末日をもって定年退職なさいました。

先生は、昭和三十一年に東京大学農学部農芸化学科を卒業、後、農林省農業技術研究所に奉職され、昭和三十八年一月に三重大農学部講師として赴任されて以来、昭和四十二年助教、昭和四十四年一高等植物の「アミノアシラーゼ」に関する研究で東京大学から農学博士の学位を得られ、昭和五十六年教授に昇格され現在に至っております。この間三十四年の長きに亘って教育・研究に専念され、幾多の優秀な人材を育成されたと共に、評議員や各種委員会の委員長等を歴任され、大学の運営にも多大の貢献をなさいました。また三重大環境科学総合研究部の発足と同時にその一員として参画され、研究を推進されたと共に、室長としての管理運営に多大の貢献をなさいました。また日本土壌肥料学会の評議員、中部支部長として学会の発展にも多大の貢献をなさいました。

先生はまた、早い時期から海外との交流を図ってこられ、農林省(在職時から東南アジアを中心とした多数の研究留学生の受け入れに尽力され、昭和四十九年と五十一年の二回にわたるご自身がスウェーデンに留学されたのを契機に、スウェーデン王立農林学アカデミー/外国人会員の栄誉を受けられ、日本とスウェーデンの交流に多大の貢献をなさいました。最近では、タイ国との学術交流に情熱を注がれ、三十回を超える渡タイの成果としてチェンマイ大学との姉妹校提携の橋渡しをなされ、チェンマイ大学植物バイオテクノロジー研究計画を三重大と共同で推進してこられたのは周知の事実です。

先生の偉大さは、いろいろな事を頭で考えるだけでなく、すぐ行動に移される所にあります。例えば、ご研究のなかで吸水性ポリマーを応用した新しい緑化工法を開発されると、海岸に松を植える作業を自身が先頭に立って実施され、そのことが次に小中学生による卒業記念植樹や市民による植樹につながり、十数年におよぶ継続したご努力が実を結び、ついに昨年三重大や津市の後援による官民一体の海岸緑化運動へと発展致しました。

最終講演は去る二月十八日に大講義室で行われました。講義のテーマは「土壌」その表面と隙間の科学」で、先生が長年手がけてこられた土壌研究のユニークなとらえ方をお話頂き、集まった学生や学部教官、卒業生に深い感銘を与えられました。また講演だけでなく、最近手がけていらつしやる吸水性ポリマーを用いた実験も披露いただき、楽しい最終講義となりました。

先生は、御退官後、第二の故郷タイと日本のあいだを往復され、ボランティアとして山岳民衆のケシ畑を「梅林」に変える大きな計画を実行に移されようとしております。今後の活躍をお祈り致します。

(小畑 記)

平成8年度 卒業・修了生の就職・進学状況

農芸化学コース卒業生		
氏名	進路	
安藤 泰幸	フジパン(株)	
伊藤 久美子	和光純薬工業(株)三重工場	
浦野 見裕	味の素ゼネラルフーズ(株)	
江南 恵子	生物資源学研究所	
遠藤 純子	生物資源学研究所	
奥野 聡子	セブンツープン(株)	
河村 聡子	生物資源学研究所	
鬼頭 優希	コーミ(株)	
金原 紀子	(株)エステム	
近田 元徳	日本臓器製薬(株)	
酒井 美穂	生物資源学研究所	
佐藤 麻未	未定	
高橋 緑	生物資源学研究所	
高平 祐造	キュービー(株)	
武内 昌代	生物資源学研究所	
武田 美江	生物資源学研究所	
竹林 慎一郎	生物資源学研究所	
多田野 牧子	生物資源学研究所	
巽 康年	奈良先端科学技術大学院大学	
田中 恵利子	トーマテック(株)	
千々岩 充崇	奈良先端科学技術大学院大学	
中井 芳樹	生物資源学研究所	
西村 有起	生物資源学研究所	
長谷川 元輝	(株)宮崎本店	
平石 智子	日本酪農協同(株)	
古川 健二郎	カネハツ食品(株)	
前山 健二	研究生	
牧野 能士	名古屋大学大学院	
松田 さおり	大栄産業(株)	
松田 俊文	京都大学大学院食品工学研究科	
松本 美和子	生物資源学研究所	
三品 輝代子	ヤマモリ(株)	
山岡 秀亮	生物資源学研究所	
山本 陽子	生物資源学研究所	
吉田 小百合	応用微生物学研究室	

大学院博士前期課程修了生

氏名	進路
大原 浩樹	生物資源学研究所(後期)
小川 泰秀	長島観光開発(株)
垣内 基和	ノボ・ノルディスクファーマ(株)
阪谷 晶弘	(株)辻製油
高田 佳和	三重県庁
高田 中宏	(株)三栄源エフ・エフ・アイ
土坂 享成	進進学塾
野口 順洋	日産化学工業(株)
野中 洋志	(株)藤沢ファイブス
松岡 基明	岐阜農林高等学校
宮原 由行	九鬼産業(株)
山南 英子	兵庫県職員土地改良事務所
山森 雅也	曾田香料(株)
王 飛志	帰国予定
許 先エ	生物資源学研究所(後期)
林 ケイ	未定
中島 広哉	エフアイエス(株)

大学院博士後期課程修了生

氏名	進路
アーンモハメッドマイル	博士研究員マレーシア(ペルタニアンマレーシア大学)
阿知和 弓子	農産物利用学研究室
チッタソニアムナット	博士研究員ドイツ(マックスプランク研究所)
宮城 智子	博士研究員米(カリフォルニア大学)
吉尾 信子	江南女子短期大学

毎年恒例になっている、卒業・修了祝賀会が今年も開催された。この会は三翠同窓会入会の歓迎会もかねており、名譽教授の先生方に加え、三翠同窓会、同窓会長、同窓会副会長はじめ多くの同窓会関係者が来賓として参加された。

会は学部長、同窓会長の祝辞に続いて赤木名譽教授による詩吟と乾杯、祝賀と続いた。祝賀の製図室で行われていたもので、

先生の偉大さは、いろいろな事を頭で考えるだけでなく、すぐ行動に移される所にあります。例えば、ご研究のなかで吸水性ポリマーを応用した新しい緑化工法を開発されると、海岸に松を植える作業を自身が先頭に立って実施され、そのことが次に小中学生による卒業記念植樹や市民による植樹につながり、十数年におよぶ継続したご努力が実を結び、ついに昨年三重大や津市の後援による官民一体の海岸緑化運動へと発展致しました。

最終講演は去る二月十八日に大講義室で行われました。講義のテーマは「土壌」その表面と隙間の科学」で、先生が長年手がけてこられた土壌研究のユニークなとらえ方をお話頂き、集まった学生や学部教官、卒業生に深い感銘を与えられました。また講演だけでなく、最近手がけていらつしやる吸水性ポリマーを用いた実験も披露いただき、楽しい最終講義となりました。

先生は、御退官後、第二の故郷タイと日本のあいだを往復され、ボランティアとして山岳民衆のケシ畑を「梅林」に変える大きな計画を実行に移されようとしております。今後の活躍をお祈り致します。

(小畑 記)

卒業・修了祝賀会 同窓会入会歓迎会をかねて 盛大に開かれる

ある。生物資源学部新館には、三百名を超える人が集まり会食できる部屋がないため、この数年第2体育館で行われている。場所は変わっても卒業して行く学生たちの気持ちは変わらないとみえて、そこに、別れを惜しみ又の再会を約する姿が見られた。

農芸化学コースに

推薦入学

生物資源学部では統合創設の昭和63年度から推薦入学を実施しており、平成9年度で10年目となる。農芸化学コースでは8年度から始められ、2名(女子)が農業高校から入学した。9年度は1名(男子)が合格した。

これまでの推薦入学者は、過去5年間をみると学部全体で毎年20名募集し、15-20名が合格している。倍率は9年度は2倍であった。府県別内訳をみると、北海道から九州まであるが、やはり三重、愛知、岐阜が多い。農芸化学コースでは昨年度、岩手、長野から各1名が入学した。他コースでも熊本、福岡、広島、香川、秋田など16府県に広く分布し、農業・工業高校の優秀な学生を広く全国から募るという意図が達成されている。

各コースとも面接に重点を置

いた選抜を行っており、小テスト形式で英語、数学、理科の基礎力を測り、入学している。入学した学生は一年次からコースが確定し、二年次で分属がきまつた学生と合流して基礎専門科目や実験などのコースのカリキュラムを受けることになる。本学部の理念や新しい統合教育で、コースの選択とそのための一年次の授業とキャンパスライフは学生にとって重要な意味を持つ。とりわけ希望のコースに入るための勉強と将来のための広い視野と知識を得るための自己訓練のバランスは一般学生にとっても悩みであり、一方、推薦入学の学生にとっては高校・大学で受験勉強にわずらわされず、将来や専門分野のための知識や興味を養成させることができ、化学コースなどではかなり

り程度の高い基礎専門科目をフォローするのに苦労するかもしれない。現在のところ、カリキュラム上で理科の既習・未習クラスをつくり、補習授業が開かれており、本制度は一学科制のデメリットを補った形になっている。進学率や卒業後の進路、留年などについてもまずまずの状況ではないだろうか。

筆者は、昨年度の一年次の担任を経験したが、一般・推薦双方の学生からそれぞれの悩みの相談を受けた。農芸化学という専門分野そのものが急激な質的変化をとり、就職戦線もきびしさと多様性を増している。本学部に学科制の導入やコース間のカリキュラム・研究の交流も一段と希望が高くなっている。卒業生特に高校の先生や上級生諸氏(3・4年生と院生)にはこの紙面を借りてコースへのご支援と理解をお願いし、また2年担任として彼等の今後の活躍を祈りたい。

(相村直樹2年担任)

岩本喜一先生を憶う

岩本喜一先生は去る一月十一日肺炎による急性呼吸不全のため八十六歳の生涯を静かに閉じられました。

先生は昭和三十一年生物化学講座の教授として赴任され、以来昭和四十八年十月に定年でご退官になられるまで十七年余、大学では評議員、農学部長、学長事務取扱などの要職を歴任されました。先生の三重大学在任中には学生運動が活発な期間もあり、当然先生は教官の先頭に立ち事態の収拾に当たられました。先生はその際、常に学生の立場を理解し、対処されました。特に大事には至らなかったものと思われまふ。さらに続いて三重県立大学の国立移管の問題があり、国立側の代表として諸問題を解決された結果、移管が実現したものと記憶しております。またこれより前には、農学部に大学院修士課程の設置、工学部の新設などにも大変なご功

績を挙げられたことは同窓生の方々ならばご存じのことと思っております。

一方、先生は学生の教育にも並々ならぬ情熱を注がれました。大学の教官が学生を教育するには自分自身が常に研究のことを考え、実行し、その経験や成果を基にして教育し、指導しなければならぬと言う方針を一貫して貫かれました。従って先生の生物化学の講義においては必ずご自身の研究に基づいた挿話が随所に入っていたと記憶しております。そのため先生に教えを受けた者には「生物化学とはこんなに興味あるものだ」とか、「研究とはこれ程奥深いものだ」と我々を魅了させたものでした。しかし、研究に費やす時間が学生紛争や県大の国立移管の諸問題などで少なくなったことを先生はききと残念に思っておられたことでしょう。また、先生は学生との対話を通して温かい感情のこもった

寺西克倫助教

農芸化学奨励賞に輝く

三重大学生物資源学部農芸化学コースの寺西克倫氏は、「生物発光・化学発光の励起分子形成機構に関する有機化学的研究」において、「一先年度日本農芸化学会農芸化学奨励賞を受賞されました。氏は平成元年に名古屋大学大学院博士課程(後期課程)を修了、その後、武田薬品工業株式会社に2年間勤務し、平成4年4月三重大学生物資源学部に着任されました。武田薬品工業株式会社に在社期間中は「発光」に関する研究をしてこられ、この受賞に至ったものと思われまふ。本研究のテーマは、生物学的・化学的発光現象がどのような分子機構で進行していくかを、分子レベルで解明するものであります。光る生物

と云えば、蛍が最初に頭に浮かびますが、地球上の生物には多くの光るものがあります。例えば、みみず、ごかい、かたつむり、きのこ、かい、いか、えび、くらげ、きんめだい、まつかさうお、ちようちんあんこう、うみほたる等があげられます。これらの発光の多くは、特定な化合物と酸素との酸化反応が生じ、この時にエネルギーが生成し、そのエネルギーが光に変換される経路をとりまふ。化学的な発光では、フラスコの中でこのような酸化反応が生じ光が放出されます。人が当然のごとく使っている蛍光灯は、電気エネルギーを光エネルギーに変換した一例であり、生物発光や化学発光とはエネルギー源が異なりまふが、発光分子の励起を經由し、その分子からの光の放出という点では同じであります。蛍

光灯の場合、電気エネルギーが光エネルギーに変換される際には、ほとんどが熱に変換され、光への変換効率は非常に悪い。このことは蛍光灯に近づいてみれば、理解できるはずであります。それに対し、生物発光では効率よくエネルギー変換が行われ、蛍の場合には、80%の効率で光に変換され、蛍のおしりは蛍光灯のように熱くありません。この効率の良い発光の理由は未だに解明されておらず、議論が絶えない状況であります。この謎が解き明かされれば、熱くない蛍光灯が出現し庶民が支払う電気代が減り、また、環境にも優しくなるものと思われまふ。

はたして氏の研究は庶民の懐を明るくしてくれるのでしょうか。今後の活躍を見守り、紹介を終らせていただきます。

早春の奈良に集う!!



専1 クラス会

をすることに決まっています。湯の山。神戸。彦根。焼津。鳥羽。と巡って六回目の今年は長谷川市長の御世話で奈良共済会館「やまと」に集った。今回の世話は関西在住の皆さんである。ここは奈良市の中心にあって部屋の窓から若草山を背にした興福寺の五重塔が見え展望が良い。有志10名ほどが早々と正午に宿舎で待ち合わせ「朝日旅行会」プロのガイド佐野君の案内で早春の奈良を歩いた。先づ奈良市寫真美術館を見学、入江泰吉さんの名作を鑑賞し新薬師寺で薬師如来と十二神將に對面。春日大社から若草山の裾をのんびり歩いて三月堂。二月堂。転宮門を経て宿に帰った。全行程四時間、コースの設定、途中ホテルでのティータイムや、ゆきといた解説等さすがプロと皆感心しきりであった。無

ぐもりで古都早春の落ちついた雰囲気を感じた。本日の出席者は十九名で東京組の欠席が目立つものの過去六年を含めて出席率50%を越すのは立派なものである。六時宴会のはじまる前にクラス物産者五名に黙禱を捧げた。例によって三翠応援歌でしめくくる送迎の宴であった。翌日は快晴の古都を散策するものが多く流れ解散した。来年は三重に帰って行い、再来年は一九九九年は卒業後五十周年を迎えるので津市で盛大に開催する予定である。紙面をお借りして出席者名を記す。

(順不同、○印今回の世話役)
○北岡、○佐野、○中尾、○長谷川、○松村、○芝田、○渡辺、○西村、○今西、○岡、○粥見、○笠井、○根、○杉浦、○別府、○松田、○藤田、○酒井、○嶋林 (今西 記)

気分爽快 ボーリングに挑戦!!

大1 クラス会

ちよつと旧聞に属することになろうか大学一回のクラス会が平成8年10月30、31両日若者にあやころと鈴鹿サーキットホテルで開かれた。穏やかな初秋の午後、出席者の顔が出揃った頃を見計ってホテル内のサーキットボールでボーリングに挑戦した。あるいは「年甲斐もなく...」と感じている面々もあつたがこれがまたやり始めるに結構楽しそうに、やがてややエキサイト気味に2ゲームを片付けてしまった。尤もスコアの突出したこの日のヒーローは出なかつた。

今回集つたのは十二名(福田映、樋口、奥田、清水、高橋、中野、服部、原田、福田支、水谷、吉田、岡本)で参加者に限って言えば半分はすでにリタイア組で残る半数が現役ないしは何らかの形で職に就いているという状況である。従って一献を交しつつの話題はどうしても「老」にまつわる事柄に走って行くことも已むを得ないことか。折しも中野常男君が青木みかささん(当日は出席されなかつた)のこのシリーズ第二作たる「老い」を看ると「老」という著書(ミネルヴァ書房発行)を紹介したことに端を発し、更に彼自身が奈良県の室生で宝生会という老人ホームを経営していることから話はいやが上にも弾み、いわばその道の大家の裏ばなし(?)を拝聴したり夫々の考え方を話し合つたりと思わぬ展開となつた。高齢社会にあ



も誰しも避けて通ることのできない問題だけに一応考慮の必要を示唆してくれたテーマであつたのではなからうか。

宴もひらけ別室にて少しばかりカラオケを楽しみ、更に場所を移してミーティングルーム(このホテルは研修目的の利用者が多いため施設が分散独立している)にて夜の更けることも忘れて談笑した。

翌日は、ワイークデーであつたので早朝に職場へ直行された方もあつた。次会での再会を約して解散した。なおそのあと地元樋口君の案内で季節外れではあつたが、「つじ」の名所の伊奈富神社と嘗て我々の学生時代にコンパで利用した保養施設「松籟荘」のあった鼓ヶ浦にある鈴鹿市伝統産業会館を訪ねた。ここは同市の伝統の技である書道用の「墨」と服飾デザインなどに使われる「伊勢形紙」について夫々の由緒、製法、用具などを展示しており興味深いものがあつた。(岡本正雄)